

2026年1月19日

第1回計算社会科学学会学術貢献賞について

計算社会科学会・学術貢献賞選考委員長 遠藤薫

第1回計算社会科学学会学術貢献賞選考委員会（遠藤薫・学習院大学名誉教授、上東貴志・神戸大学教授、岡田勇・創価大学准教授、野田五十樹・北海道大学教授、寺野隆雄・千葉商科大学教授）は、客観的かつ多面的協議の結果、第1回計算社会科学学会学術貢献賞受賞者として、鳥海不二夫・東京大学教授の推薦を決定いたしました。

推薦理由は、以下のとおりです。

1. 計算社会科学の開拓と理論的貢献

鳥海氏の最大の功績は、日本における計算社会科学の基盤を築き、学際的な研究領域として確立させた点にあります。同氏は、従来は質的な分析や小規模なアンケートに頼らざるを得なかった社会学的な問いに対し、情報工学の手法を導入することで、定量的なアプローチを可能にしました。

2. 社会的課題への迅速な対応：COVID-19 とフェイクニュース

鳥海氏の業績が国際的にも注目を集めた一因に、社会的な危機に対する迅速なデータ分析があります。新型コロナウイルス（COVID-19）のパンデミックに際しては、Twitter（現 X）上の膨大な投稿を分析し、人々の感情の変化や自粛要請への反応、ワクチンに対する疑念（ヘルス・コミュニケーションの問題）などをリアルタイムで可視化しました。

3. 「情報的健康（Informational Health）」の研究

2に示した問題意識および研究成果を踏まえて、鳥海氏は、山本龍彦氏（慶應義塾大学教授）との協働により、「情報的健康（Informational Health）」の研究を行っています。鳥海・山本両氏は、現代人が SNS など「自分が好む情報」や「感情を揺さぶる情報」ばかりを摂取してしまう状況を、食生活における偏食やジャンクフードの過剰摂取に例えています。そして、この問題の解決策として、単に「個人のリテラシーを高める」だけでなく、①情報の成分表示、②「情報ドック」の提供、③デジタル・ダイエットの提供、④アテンション・エコノミーに代わる経済構造の模索・探究、などを提案しています。

この研究は、問題設定・解決の重要さだけでなく、鳥海氏（情報学）と山本氏（憲法学）の協働という分離融合型研究であり、この点からも、計算社会科学の業績として卓越したものと評価できます。

4. 人狼知能 (AIWolf) を通じた知能の社会性の探究

学術的なユニークさにおいて、鳥海氏が主導する「人狼知能 (AIWolf)」プロジェクトも特筆に値するでしょう。これは単なるエンターテインメントの研究ではなく、将来的に AI が人間社会に共生する際、いかにして「納得感のある合意形成」や「倫理的な対話」を行うかという、AI の「社会的能力」を測ろうとするもので、技術と社会をつなぐという意味で「計算社会科学」の重要なターゲットの一つと言えます。

5. 国内外における評価とネットワーク

鳥海氏の業績は、国際会議 (IC2S2, WWW, ICWSM など) での発表や、権威ある学術誌への論文掲載を通じて、世界的に認知されています。

- **受賞歴:** SocInfo (Social Informatics) での Best Paper 賞や、情報処理学会の特選論文、東京大学工学系研究科長表彰など、その卓越した研究成果は多方面から表彰されています。
- **国際的なプレゼンス:** 計算社会科学の国際ワークショップ (ABCSS) の主催や、トップカンファレンスでのプログラム委員を歴任し、日本と世界の研究コミュニティを繋ぐハブとしての役割を担っています。
- **計算社会科学のアウトリーチ:** 計算社会科学は先端的科学領域ですが、その試みは、多くの人と共有される必要があります。鳥海氏は、『計算社会科学入門』(丸善出版) などの編著により、計算社会科学を社会に広めるための貢献を行なっている。

以上の理由から、鳥海不二夫氏は、緻密なデータ分析と大胆なシミュレーション手法を武器に、デジタル化する現代社会の構造を読み解く第一人者といえます。同氏の研究は、計算社会科学という新領域を切り拓いた学術的価値に加え、AI 社会のルール作りや民主主義の持続可能性といった、人類共通の課題に対する処方箋を提示している点において、国内外で高く評価されるべきものであり、第1回計算社会科学学会学術貢献賞にふさわしいと考える次第です。